

秋の法要・福祉講座

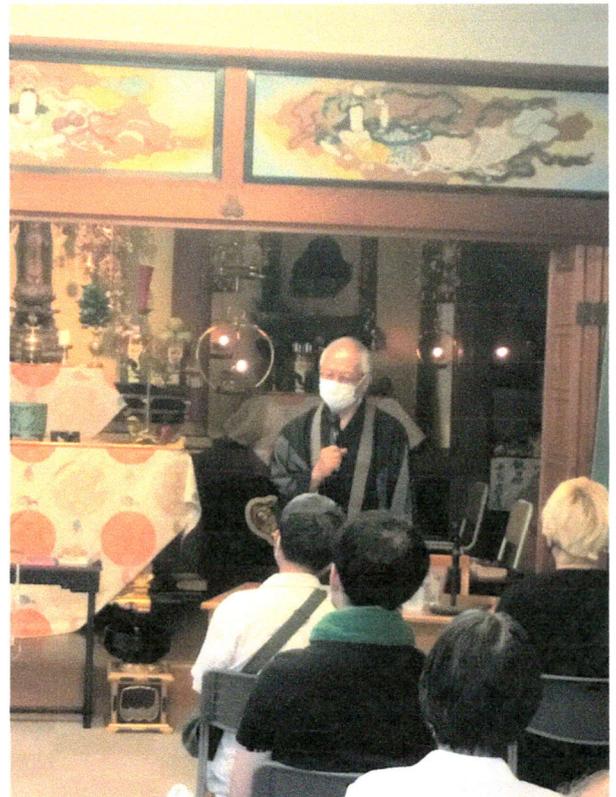


去る9月4日(日)午後1時半～徳成寺において、秋の法要「福祉講座」が勤まりました。この日は、朝から熱中症警戒アラートが出される程、厳しい暑さにも関わらずお参り頂き、誠にありがとうございました。9月4日は、語呂合わせで「供養の日」とも呼ばれているそうで、秋の法要も詳しく申しますと秋の永代供養経法要なので、その意味でもピッタリの一日でした。秋の法要の講師も久しぶりにご住職をお招きし、おかげ様でご法話の迫力が伝わって来たという声も聞かれる法要でした。

今回、お招きしたのは神奈川県横須賀市から海 法龍(かい ほうりゅう)ご住職です。「誰のために葬儀を勤めるのか」と題した法話をして頂きました。

最初に、何のために仏教の経典があるのかという問いかけがなされました。亡き人を偲ぶための意味と、もう一つ老・病・死という思い通りにならない現実の中でも生きていける明るさを持つために経典があるのだと教えて下さいました。

またNHKの番組でサンドイッチマンの「病院ラジオ」の話題を紹介しつつ、私たちの日頃の心は「辛い病気」を嫌悪したりしているが、その辛いことが家族を互いに支え合い、生きる事の深さ・温かさ・明るさを与えてくれるところに、人間の真実が輝いていると見出されました。



仏教の教える悲しみや苦しみからの救いとは、どんな現実のただ中であろうと、生きる事の温かさを感じ取り、人間が明るく輝くことだと指摘して頂きました。その温かさを正信偈の冒頭に「帰命無量寿如来」という「寿」という言葉で言い表し、人間が明るく輝いていることを「南無不可思議光」の「光」と歌っているのだと。数値やお金に換算できない人間の尊厳を「宝」と言い表し、そこに気づかせてもらうのが葬儀やご法事という儀式に込められた深い願いなのです。

